

「世界遺産白川郷」における観光の現状と課題

Current Condition and Issues of Tourism in Shirakawa-go; the World Heritage Site

黒田 乃生*
Nobu KURODA

1. はじめに

2008年5月「白川村リゾートホテル計画 伝統守れるか不安も 経済効果、雇用に期待ムード」という見出しの新聞記事が掲載された¹⁾。1995年に世界遺産に登録されてから13年が過ぎ、観光地としての「白川郷」は大きな転換期を迎えている。2002年の羽生らによる調査では「白川郷」は高山から金沢などの行程の中継ポイントとして位置づけられており、滞在時間は平均2時間と短いこと、観光対象施設が乏しいこと、宿泊施設のキャパシティが不足していることなどの問題点が指摘された²⁾。本稿ではその後の変化を踏まえて課題について考察する。

2. 世界遺産登録後の変化

(1) 来訪者数

白川村の来訪者数は1960年代からほぼ一貫して増加を続けている(図-1)。最も顕著に増加したのは1995年の世界遺産登録(20万人/年の増加)と2008年の東海北陸自動車道全通(40万人/年の増加)である。2008年秋の行楽シーズンには白川郷インターチェンジから荻町集落まで渋滞し、平時ならば10分ほどで到着する世界遺産の集落まで約2時間かかるという状況であった。

(2) 観光施設

観光調査が実施された2002年から現在までの8年間に

公開施設が2軒、飲食土産物屋は15軒増加し、民宿が1軒減少した³⁾。また、観光マップには掲載されていないが、個人が経営している有料駐車場は少なくとも3箇所新設された。こうした増加のもっとも大きな理由は、公共事業の減少に伴う建設業の不振である。村にいくつもあった建設会社の中には倒産するところもあり、生活費獲得の手近な手段として観光業を始めたものであると考えられる。

(3) 外国人観光客

ここ数年で目立つのは外国人観光客数の増加である(図-2)。2008年度約12万人のうち76%の約9万人が台湾からの来訪者である。観光協会は中国、台湾、韓国、英米向けのパンフレットを準備して対応している。また、昨年来の大きな出来事のひとつとして、ミシュランガイドの三ツ星獲得があげられる。2008年5月、ミシュランの評価員が合掌造り家屋の民宿に一泊して「白川郷」の評価を行なった。結果的に「白川郷」は三ツ星、「荻町」は二ツ星という奇妙な評価になり、白川郷の欄の最後には「日中、特に週末は大変混雑しており、この村の魅力を全て感じることは難しい。一泊するのがいいだろう。」という説明が付されている⁴⁾。ミシュランによる効果は今後を待たなければならないが、個人旅行が主体の欧米からの来訪者と団体バスでやってくる台湾、中国からの来訪者のニーズはそれぞ

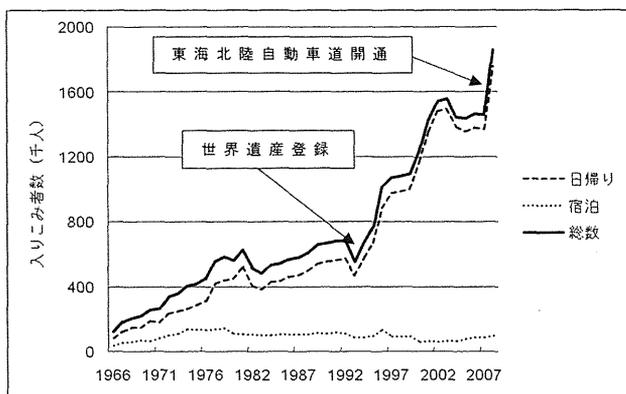


図-1 白川村の入込み客数の推移 (白川村統計より)

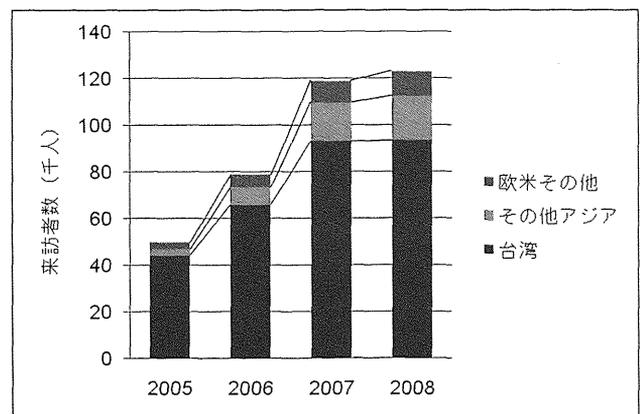


図-2 白川村の日帰り外国人の国別人数の推移 (白川郷観光統計情報より <http://www.shirakawa-go.org/lifeinfo/info/kankou/main.htm> (2008.5.18 参照))

*筑波大学大学院人間総合科学研究科 Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba

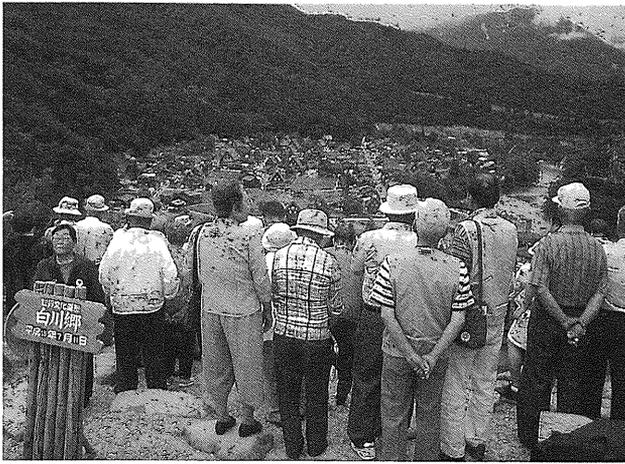


写真-1 展望台に集まる観光客 (2006)

れ異なるものであろう。

(4) 交通規制

2006年度からは主に毎月第3金曜日と土曜日に限りパークアンドライドが、2009年9月からは集落への大型車両の乗り入れ規制が実施予定である。これらの交通対策は試行に至るまでに地域の住民らによる話し合いが繰り返された。2009年度には世界遺産地区外への駐車場の整備も始まり、新たな交通システムがようやく完成しつつある。

3. 今後に向けて

(1) 全村の対策

白川村は2008年度に景観計画を策定し、外部資本による大規模施設の建設を規制するために、荻町集落とともに展望台から見える寺尾が重点景観形成地区に指定された。しかし、重点景観形成地区に指定されていない白川郷インターチェンジから荻町集落に至るまでの玄関口とも言える国道156号線沿いには飲食店、整備工場などが少しずつ増え始めており、これらの新しい建物への景観的な誘導を急ぐ必要がある。荻町集落内では厳しい規制によって建設することができないさまざまな施設を国道沿いで展開できる可能性があるだけに、玄関口としてうまく活用、誘導することが今後のより充実した観光体験に繋がると考えられる。

(2) 外部資本への対策

もう一点は、荻町集落における「売らない、貸さない、壊さない」の限界と見直しの必要性である。この三原則を守ってきたからこそ、世界遺産登録があり今の荻町集落の景観があることは明白である。しかし、現実には全国に展開している店舗の「白川郷店」も存在し、外部資本の流入が確認される。以前から、地場産品が少なく高山などで製造された土産物が並べられているという問題点は指摘されていた。つまり、売るものを地元で作っていないという点においてはずっと以前から外部資本が入っていたともいえる。先述の店舗は従前の店に比べ洗練された内装、異なる

品揃えのために、冬期のライトアップ時も他の店に比べ多くの観光客で混雑していた。今後乱立する店舗の過当競争が始まるとすれば、それぞれの店に横並びではない独自の工夫が必要となる。また、その工夫は全国展開された店の借り物ではなく、地域内での工夫やこだわりが求められる。

大規模資本に関しては、冒頭のリゾートホテルは、建てるのが可能であればどのような歩み寄りが必要なのか、村に事前に問い合わせたことは良心的であるとも解釈できる。景観計画では「営業」の規制はできないため、今後大規模資本の流入を手遅れにならないうちに食い止めるには方策が必要である。いずれにせよ「建てさせない」一辺倒の対応では限界があり、建てさせるにはどのような制約条件が必要か、どのような立地と施設であれば白川村が目指す観光地像と一致するのかを明確に打ち出す必要がある。

(3) 新しい動き

現在白川村では観光への新しい取り組みも始まっている。観光協会や民宿が主体となって行なっている「まるごと体験塾」では様々な体験プログラムを提供している。また、白川村商工会は味噌を使った地場産の土産物を企画、販売し、「白川郷ものづくり実行委員会」では新しい産物づくりに力を入れている。これらの取り組みはいずれも散発的で、また体験塾では受け入れ側の負担が大きいこと、土産物の材料は白川村だが生産は工場のある高山でやらざるを得ないこと、またせっかく開発した商品が買える場所が限られていることなどの問題点もあるという。

「世界遺産白川郷」は文化財保護においてはおそらく群を抜く先進地であるが、観光の取り組みという点では後進地になってしまったともいえる。パークアンドライドや体験型のプログラムもようやく始まったばかりで、他の観光先進地域に比べて大きく遅れをとっているのが現状である。戦略がないままに店だけが增加すれば、いずれ地域内の競争がおこり、さらには広域的な視点からの「観光地白川郷」の価値が下がることは想像に難くない。人気絶頂の今こそ、地道に客を喜ばせる努力をしている「実力派」の他地区を見習って、様々な魅力を再発見し、発信し始めなければならない時期に来ているのではないだろうか。

参考文献

- 1) YOMIURI ONLINE
http://chubu.yomiuri.co.jp/tokushu/dounaru/dounaru080524_2.htm
- 2) 羽生冬佳他(2002):観光客の受入対策の調査報告書及び実施プラン:財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団, 107-108
- 3) 現在の営業数は観光協会が配布しているマップから算出。生活用の店舗が観光客向けのお店に変化したものも含む。
- 4) Michelin(2009):ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン 2009, 382-384